

第8課 「ローマ7章で述べられている人」

*善と悪の狭間に置かれた私たちは、実に大きな悩みの中にある。狭間に立たされてはいるが、私たち自身は悪の傾向を持つ罪人であるので、神の支え無しには常に悪の側に身を置いてしまう。パウロの悩みは、善を欲するにもかかわらず、悪の現実の中にある罪人であることに対するものであった。しかし、神の愛が心に差し込み、イエスの贖いと罪の勝利がもたらして下さった義認を思う時、希望へと導かれる幸いを感じているのも確かである。

1. 律法の問題

- **律法に縛られている (律法主義)** : 紀元1世紀のキリスト者の持つ悩み (問題) が、ユダヤ教の律法主義との関わりに基づいていることを前提に考えること (律法主義に陥ったキリスト者に対する警告) が大切だと思う。故に律法は人にとって決して悪ではなく忌まわしいものでもない。それは私たちがどんな立場であるかによって意味が変わってくる。悪を求め罪を愛し犯す者にとって律法は忌まわしいものかもしれないが、善を求め愛を探求する者にとっては大切な指針となる。
- **律法と結婚制度** : 当時のユダヤの社会において、結婚は女性にとっては夫の束縛のもとに置かれるという意味もあった。(ローマ7:2~3)。そのような見地から律法の問題が語られている。つまり、ユダヤ教の制度 (律法主義的な) が死ぬ事 (存在しなくなる) によって、「他の方」「死者の中から復活された方」(イエス・キリスト) と再婚する (イエスのものとなる) 事が示される (ユダヤ教徒からキリスト者となる) 。
- **律法と罪** : パウロは「律法によらなければ、わたしは罪を知らなかった」(ローマ7:7) と語った。この言葉がキーワードとなる。律法は決して罪ではない。しかし、それを人がどう扱うかによって律法が罪をもたらす場合がある。たとえ道徳律であれ、礼典律であれ、律法主義のもとにあることが問題なのである。私たちは「肉に従って生きている間」(罪人としてイエスを知らず本能のままに生きていた間) は、まさに罪の側に立ち、罪の奴隷であった (ローマ7:5) 。
- **律法が罪を誘う** : 律法は人間の内にある欲情を誘発し罪を犯させる働きもある事も確かである。人が何かを意識すると、その意識は欲望を増大させる (興味が強くなる)。意識することによってその問題は今までより大きな関心事となる。意識するあまり、こだわったり、過度に反応したりもする。場合によっては罪を引き出し、増幅させる事だってあるかもしれない。律法の場合、それが人を裁いたり、比較したり、差別したりする罪となってしまう。(ローマ7:8~11) 。
- **律法の働き** : 律法がなければ罪は無くなるのだろうか? 決してそれはない。罪の認識が無くなるという意味である。人は罪に欺かれ、罪の自覚を感じた時、人は死への恐れと自覚を心に持つ (背負いきれない重荷)。律法には次のような働きがある。①罪の自覚を与える (ローマ7:7) ②罪を生起させる (ローマ7:8) : 本来は善である律法を逆手に取り、人の心を攻撃の拠点として確保し、收拾のつかない程のむさぼりの心を引き起こしてしまう (他者を裁く)。③死に導く (ローマ7:9~10) : かつては律法を意識せず過ごすことができた。しかし、律法を意識することによって罪の意識が心によみがえり、死への自覚を生じしめた。つまり罪の意識は私の死となったのである。
- **律法は聖なるもの** : 律法自体は罪ではなく、私たちの内に働く罪が問題である。律法の本質は、神の本質 (愛) の反映であり表れであり、律法に照らし合わせると罪が浮かび上がってくる。罪の自覚、罪の意識、使徒滅びへの恐れと不安が生じ、まさに生きた心地がしない (ローマ7:12~13)。律法によって罪を自覚させられたパウロは、自分は罪の奴隷であり、奴隷として不自由である事。自分の行ないたい善 (イエスの模範に従いたい) を行なうことができない弱さに対するジレンマを感じている (ローマ7:14~15)。この縄目から解き放っていただき、神の目に当たり前の善を行なえる者にしていただきたい。

2. ローマ7章の人、パウロとキリスト者たちの思い

- **聖なる善に対するジレンマ** : 私たちは律法を通して神の品性、本質を見る時、本来それが人に与えられていたことを知る。そこに自己矛盾を感じ、惨めになり、情けなくなり、いたたまれなくなり、悔しくなる。するとどうにかならないか、どうにかしてほしいという願望が生じ、それを実現させて下さるのは神であり、

神はイエスをそのために建てられた事を知るようになる。イエスのお働きにより、神の愛が示され、その愛

が私たちの乾いた心に潤いとなる。希望そして確信へと導かれる（ローマ7:16~17）。

- **律法を守るためには**：神が与えて下さった律法は、神の助けなくして守ることはできない。自分の力で律法を守ろうとする愚かさを知らねばならない。自分の力で律法を守ろうとするのは一時的であり、すぐ挫折し

てしまう。もし、それを繰り返そうとするならば、それこそが罪（自己中心、自己称揚、自己満足、神の必要を認めず求めない）（ローマ7:18~20）。

- **死からの救出**：パウロは深刻な自己認識と鋭い罪の自覚の苦悩を通して、大切な真理を発見する。それは悲しい発見でもある。善を行ないたいと願う自分自身に悪が宿っているという現実。罪の奴隷であるという事。

自分の中で善と悪の戦いが常にあること。実は神は私たちにここに導かれる。律法は自己吟味し、罪の自覚

を持って真理と救いを求める必要へと私たちを導く。ここにキリストの必要を強く求め、神の愛が注がれる

必要を感じる（ローマ7:21~23）。パウロは改めて、罪に支配され、欲する善を行なえず、そのまま滅亡へと向

かっていこうとする苦悩を告白する（ローマ7:24）。しかし、救い主によってもたらされる勝利の事実、救われる約束、この世にあって強く雄々しくあり続けることができる事を神に感謝する（ローマ7:25）。

*私たちはイエスとともにある限り、弱く虚しい自分が支えられ、勝利の約束に基づいて、希望を持って罪の中に生きる。善なる力と希望が与えられている。私たちは、イエスと共に生きる時、どんな事があっても正しく生きてゆこうとする心が萎える事なく歩んでゆける。